

あわれみの家

ヨハネ 5:1-9

福音書の中にイエス・キリストが多くの人々を癒されたことが記されています。しかも癒し方も人それぞれです。直接、病人に触れて癒されたこともあれば、土とつばきを混ぜてそれを患部につけて癒されたこともあります。イエス様の衣に触れて癒された人もいます。様々な方法があります。今日見てみる男性はみことばによって癒されました。別の言い方をするならイエスのことばを信じる信仰によって癒されたのです。そのことを詳しく見てゆきます。

この日、イエスは神殿を出て、ベテスダの池に向かいました。神殿を取り囲むエルサレムの城壁の近くには、ここかしこに人工の池がありベテスダの池もその一つでした。池はエルサレムで使う水を貯めておくため、また、神殿にやって来る巡礼者が渴いた喉を潤し、手足を清めるために使われていました。ですから木や草に囲まれ、トンボが飛んでいるような日本でよく目にする池の光景ではないのです。ベテスダの池の周囲は回廊で取り囲まれていました。5つの回廊がついていたとありますがそれは凶のような意味です。ベテスダの池の水は時々、かき回わされることがあったのですが、そのとき、真っ先に水に入った者は病気が直るという話がまことしやかに広まり、この回廊には多くの病気の人や身体の不自由な人たちが集まるようになっていました。その話は下の註の4節に詳しく書かれていますが新改訳第3版も2017もその部分を割愛しています。4節が飛んでいることに気づかれた方もいらっしゃると思います。それは聖書の成立上、後から意図的に書き加えられたと理解され、省かれたのがその理由と思われる。しかし大勢の病人がいたこと、また集まっていた目的は身体の癒しのためであったことは確かです。

イエスはその中のひとりの人に目を留めました。この人は38年間も病気で、たとえ、池の水がかき回わされても、自分の力では水に入ることができない状態になっていました。イエスはそれを知ったうえで、この人に「よくなりたいか」と声をかけられました。

皆さんは、このイエスの呼びかけをどう思われますか。自分が病人だとするとこの言葉をかけられてどんな気がするでしょうか？恐らく、そんな分かり切ったことを何故聞くのか？と反論したくなるのではないのでしょうか？病人に「よくなりたいか」などときかなくても、「よくなりたい」にきまっているのではないか、と思いませんか。普通はそうです。しかし、人は、逆境にさらされると、最初のうちは、「このままではよくない」と、懸命に努力するのですが、そうした状態が長く続くと、「努力しても何も変わらない」というあきらめの気持ちが起こってきて、現状に吞まれてしまうことが多いというのも事実です。人間の心理というもの複雑で、自分でも気が付かない間に、逆境が居心地の良い場所になってしまうことがあるのです。逆境であることから受ける辛ささえ我慢すれば、それと引き換えに受けるメリットもあるのです。こういうことをセカンダリーゲイン（二次性利得）と言ったりします。ほんとうは解決の道や、向上の機会があるのに、「この問題や困難を抱えているかぎり、私は何もできないのだ」と言って、問題や困難の中に座り込んでしまうことがあるのです。他人に責任転嫁していつも被害者だ、犠牲者だと言ったりするのです。

いままでイエスに病気を癒やしてもらった人たちには、「よくなりたい」という願いがありました。人間に意志を与えた神は、私たちが自分の意志で救い、助け、力を願い求めるのに答えて、働いてくださいます。もし、私たちが願うことも、求めることもせず、また、神が提供してくださる恵みを受け入れることがなければ、それは私たちのものにはならないのです。それでイエスは、あきらめの中に沈み込んでいたこの人の意志を呼び覚ますために「よくなりたいか」と呼びかけたのです。この人は「よくなりたいか」と聞かれて「はい、よくなりたいです」とは言わず「他の人が私をさしおいて入ってゆくのです」と答えました。つまり私が長い間、このような状態にあるのは周りの多くの利己的な人々のせいです」と言っています。つまり私は被害者で可哀そうな人なんですと言っているのです。

もっとも「よくなりたいか。」今までだれひとりこの人にそう語りかけた人はいませんでした。誰かが何かを語りかけたとしても、それは「大変ですね」「お大事に」といった言葉だったでしょう。「よくなりた

いか」と呼びかけるからには、この人を癒やすことができ、回復させることができなくてはなりません。そうですね。「よくなりたいか」と聞かれて「はい。よくなりたいです」と答えた人に「そうだよね」とか「よくなれたら良いね」では話になりません。イエスの「よくなりたいか」という言葉には、「あなたの本当の願いは何なのか？」ということと「私はよくしてあげることが出来る」という意味が込められているのです。イエスは今も、同じように私たちに語りかけてくださいます。日々の祈りの時に、週ごとの礼拝で。聖霊の直接の語りかけを通して、他の人の言葉を通して。ある時は優しく、ある時は厳しく。何度も、くりかえし、語りかけてくださっています。私たちは、たんに聖書を「なるほど」と言って知性で理解するだけでも、他の人の証に感情を動かされるだけでもなく、このイエスの語りかけに、自分の意志を働かせて答え、イエスがくださる救い、助け、力を受け取りたいと思います。「あなたはよくなりたいですか?」「あなたの本当の必要は何でしょうか?」と。

さて聖書には7節でこの人が答えた後、すぐに8節でイエスが「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と言われています。私は何度もこの箇所を読みながらイエス様がすぐにことばを返されたのではなく、ある程度の時間がかかっているのではないかと思うようになりました。それはこの人の視線つまり心が外側のことばかりに向いていて、自分の内側に向いていないことにこの人自身が気づくための時間が必要であったということです。神の前にあって本当の自分自身の必要に気づくための沈黙の時とも言えるでしょう。その後、イエスは「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と言われました。このことばも唐突であり大胆なことばです。何の前置きも説明もありません。いきなり「起きて荷物まとめてそこを出てゆきなさい」と言われたのです。普通なら、何故ですか? そう言える根拠を示してくださいと言うところです。しかし、その人は何も言いませんでした。みことばには「すると、すぐにその人は治って」とありますが先ずなかなか理解し難いイエスのことばを信仰をもって受け止め、次にその結果癒されたという順序であることが分かります。この人はみことばによって癒されました。しかしそれは一方的にみことばが働いたのではなく、みことばによって心探られ、みことばによって信仰による応答へと導かれたことによるのです。

さて、イエスがこの人を癒やしたことから、論争が起きました。イエスがこの人を癒やしたのが、「安息日」だったからです。イエスは、この人に「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と命じ、この人は床を取り上げて歩き出しました。するとユダヤの指導者たちがすぐに飛んできて、「きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない」と言って、この人をとがめました。「起きて、床を取り上げて歩く」ことは、安息日に禁じられている「労働」だということです。彼らは、この人をとがめただけでなく、イエスを見つけ出し、イエスを非難しはじめました。

ユダヤの指導者たちは、安息日の戒めを正しく理解していませんでした。安息日は、神が人を労働の重荷から解放するために与えた恵みの日です。「働いてはいけない」という禁止事項に重点があるのではなく、自分も、まわりの人をも「休ませる」ことに重点があるのです。イエスに癒してもらった人は38年間、立つことも歩くこともできず、寝床に縛られていました。彼にとって病気はどんな労働よりもつらいものでした。一日といえども彼は「安息」を体験しなかったのです。安息日にその束縛から解放されたといったらどこが悪いのでしょうか。いいえ、安息日こそ、心身の重荷から解放され、癒やされる日でなければならぬのです。

イエスは、安息日こそ、神のあわれみのわざがなされる日だと、教えています。イエスが38年間床に伏したままの人を癒やしたのは「ベテスダ」の池でしたが、この「ベテスダ」という名前には「あわれみの家」という意味があります。イエスは、「あわれみの家」で、あわれみのわざを行うことによって、安息日が、じつに神のあわれみの日であることを人々に教えているのです。私たちもイエスの復活の日、日

曜日を守っています。しかし、この日を「教会に行かなければならない日」と考えているとしたら、それは、大きな思い違いです。日曜日は「教会に行かなければならない」という戒律や重荷を背負い込む日ではありません。この日は、仕事や家事から解放されて「教会に行くことができる日」です。教会は、私たちの「ベテスダ」、あわれみの家です。私たちはここで一週間の心身の疲れを癒やされるのです。日曜日をはじめ様々な教会の奉仕も「喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。」(詩篇 100:2) とあるように神様に仕えることが出来ること、自分が用いられていることを喜び感謝する日です。『さあ、主の家に行こう』人々が私にそう言ったとき、私は喜んだ。」(詩篇 122:1) そのような喜びをもって教会に集いたいと思います。コロナ禍で教会の活動は大きな制約を受けています。特に礼拝は以前のように全員集まれません。ネット礼拝を用いることによってかなりカバーが出来ていると思います。しかしこれも教会に行かなければならないと考える人にとってはずいぶん便利で楽な方法が見つかったと考えてしまうかも知れません。実際、あわれみの家である教会で共に祈り、共に賛美し、共に過ごすこと、これほど大きな恵みの時はありません。

イエスの「癒やし」は「論争」となり、さらにユダヤ人との「衝突」となりました。こうした論争や衝突を、イエスは、避けようと思えば避けることができたでしょう。しかし、それを避けたなら、イエスが神の御子であることが明らかにならず、誰もイエスを神の御子と信じて救われることができなかったのです。ユダヤの指導者たちは、「癒やし」を見て驚きもせず、それを行ったイエスとはいったいどのようなお方なのだろうと考えもしませんでした。かえってイエスを神を冒瀆する者と決めつけました。私たちもそれと同じ間違いを繰り返さないようにしたいと思います。イエスが、「癒やし」と「教え」を通して示してくださっていることを、素直な心で受け入れたいと思います。イエスをご自分が神の御子であることを示しています。この神の御子が私たちに「よくなりたいか。よくしてあげよう」と、救いと助けと力を提供してくださっているのです。「私に出来ないことを神様やっておいてください」と祈るのではなく「私には出来ないと思えるあなたのみことばに信仰をもって答えさせてください。そして私は何をしたら良いのか、教えてください」と祈り、信仰者としての道を進みゆきたいと思います。